

病弱特別支援学校における通級指導教室の実践

○前田正博

松本秀彦

（高知県立高知江の口特別支援学校）（高知大学大学院総合自然科学研究科教職実践高度化専攻）

KEY WORDS: 病弱教育 通級指導教室 ICT

【目的】

病弱特別支援学校における通級指導教室は、不登校等の背景に病弱があることを考えると、児童生徒の社会参加といった自立に向けた教育の機会提供として通級指導教室における自立活動の指導実践は非常に重要である。そこで、本研究は、通常学級の病弱のある生徒の自立活動について、標準化された検査と行動観察による実態把握、指導実践および評価に至るながれで指導実践を県立A特別支援学校で行った事例報告を行い、通級指導の意義を考察する。

【方法】

県立A特別支援学校の通級指導教室に通う1名の生徒を対象に、認知・心理的特性や知能検査の結果を基に実態把握を行い、20xx年5月～12月に担当教師と学習場面を主体とした自立活動の指導を行った。指導に先立ち本人と保護者に承諾を得た。

【結果】

1. 生徒Aの実態及び目標

中学3年生男児で、一斉授業に参加できない状況があった。強みの視覚優位の特性を生かした学習で理解を深めることで自立活動の観点「心理的な安定」をはかることとし、在籍校での一斉学習参加を目指した。指導目標は「視知覚の強みを生かした学習方法を身に付ける」と設定した。

2. 生徒Aの指導内容

手順書やヒントカード等を視知覚を活用した教材を用い、「認知機能を高める課題」、「タイピング」、「漢字学習」および「数学」に取り組んだ。数学では、関数や連立方程式、図形、文章問題の公式をヒントカードとして提示し、解き方を区切って学習した。漢字学習はタブレットアプリを用いてなぞり書きを行い、漢字の全体像をイメージしてから偏や傍の部分練習をプリント学習した。その後、学習した漢字を用いて熟語を書く課題を行った。

3. 生徒Aの指導実践の結果

（1）数学（中学2年生レベル）

計算問題は10問中7問解くことができた。誤答の内訳は「問題文の意味理解ができなかった（1問）」、「解き方がわからなかった（2問）」だった（Table.1）。文章問題は10問中3解くことができた。誤答の内訳は「解き方がわからなかった（7問）」だった（Table.2）。間違えた問題は、解き方を段階的に示されることで解くことができた。

（2）漢字学習（小学4年生レベル）

漢字学習では、編や傍を書く課題を行うと、タブレットのアプリで学習した漢字は正確に書くことができ75%前後の正答率だった。熟語や間違い探しの課題を取り入れることで正答率が90%近くに上昇した（Fig.1）。

（3）ICT活用について生徒の感想

ICTの活用について行った生徒アンケートでは、ICTを活用した通級での学習をわかりやすいと回答し、在籍校での学習にもICTを活用したいと回答した。

Table.1 計算問題のエラー分析

エラー内容	指導回数				合計
	1	2	3	4	
解き方がわからない	0	1	1	0	2
計算間違い	0	0	0	0	0
文章読み取り間違い	1	0	0	0	1
合計	1	1	1	0	3

Table.2 文章問題のエラー分析

エラー内容	指導回数				合計
	1	2	3	4	
解き方がわからない	1	2	2	2	7
計算間違い	0	0	0	0	0
文章読み取り間違い	0	0	0	0	0
合計	1	2	2	2	7

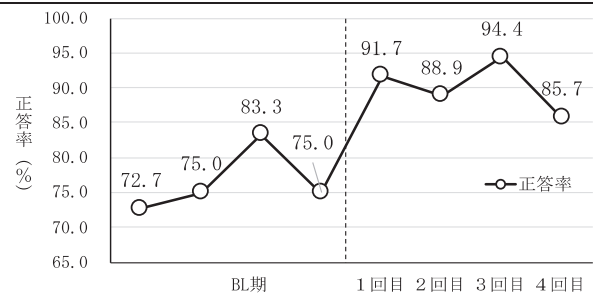


Fig.1 漢字課題の正答率

【考察】

1 生徒Aの指導実践の考察

漢字学習の最初に行ったタブレットのアプリによるなぞり書きは、タブレットによって書字を代替することで学習定着が高まり、強みを生かした学習が効果的だと本人が実感した可能性が高い。また、視知覚の強みを生かした間違い探しの課題を取り入れたことで学習効果が高まったと考えられる。数学では解答を見て解き方の全体像を把握してから、解き方が段階的に提示されることで、理解が深まり自分から考えて解くことができた。併せて、ヒントカードで公式や解き方が示されると問題を解くことができたことから、視覚情報を理解する力の高さを活用して学習できたと考えられる。その後、在籍校の教室で自発的に問題集を見る等の行動が認められており、学習効果を実感したことが学習意欲につながったものと考えられる。ICT活用のアンケートからも、自分に合った学習方法を知りそれが効果的であると実感していることが明らかになった。

2 通級指導教室の実践を通して

今回の事例は発達障害からの二次障害として心理的負担が身体症状として表れ、教室での学習や学校への登校を妨げていた。状態像の背景要因について聞き取りや標準化された各種検査結果から分析することで本人の強い力を生かした学習方略や性格特性を加味した指導計画をたてることができた。特に興味関心に関連付けた学習方略を用いることと、ICTを活用した指導は児童生徒の学習意欲を高めたものと考えられる。また、ICT機器を活用することは困難を克服でき、児童生徒の可能性を広げることにつながると考えられる。

3 今後の課題

病弱の児童生徒を対象に行った通級指導教室の実践の課題は、通級指導での学びを在籍校や家庭での学びにまで一般化させることができなかった点である。そのため、在籍校の状況把握や、担任等と情報共有を行うために、ICTを活用することで連携を強化し、支援をつないでいくことが必要である。

(MAEDA Masahiro, MATSUMOTO Hidehiko)